2022年2月6日 川越教会

丸山　勉

近づいている救い

［マルコによる福音書13章1～2、31～37節]

イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」 イエスは言われた。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

1. 「時間」と「救い」

新しい年も一ヶ月が過ぎてしまいました。暦ではもう立春になったのですね。日本は特に四季の移り変わりが美しい国ですよね。もう来月も後半になれば桜が咲きます。そのように私たちは季節がめぐるという「時」というものにはとても敏感なのだと思いますが、自分の中の「時」というのはあまり前向きに考えたくないという所があるかも知れませんね。つまり「年を重ねる」ということです。それは、私たち、もう「時間」というものは帰ってこないということを知ってしまっていますから、「時」を疎ましく思うというか、英語でアンチ・エイジングなんていう言葉が普通に使われるように、年齢を重ねるということイコール ネガティブであるという感覚を持ちやすいと思います。

けれども、今日の聖書の箇所を読んでいて、私は今まであまり感じて来なかったことを感じたのです。それは、「時間」というものは、一見取り返しがつかない残酷なことのように思うのですけれども、私たちは一日一日、日を重ねて生きているということは、昨日よりも今日、今日よりも明日、「救い」が私たちのもとに近づいていることだと思ったのです。本当にそうだと思うのです。今日の聖書の箇所は主イエスが語られた「終わりの日」の約束です。時を始められた方・神様が、この時を完成される時が来ると言うのです。いつかは分からないけれども、「その時」というのは必ずあって、私たちの人生は「その時」を目指して生きている。いや、そうは言うけれども、私たちその前に死んでしまうでしょう、だったら意味がないと言われるでしょうか？そんなことはないと思います。「その日」の中に私も必ず入るということを知って生きるのと、ただこの身体が滅びるとすべては空しく終わる、と思って生きるのとは全く違うのではないでしょうか。

私は、週報にも書きましたが、まだ聖書の神様を知らなかった時は、自分の存在というのはただの偶然の産物でしかなく、そのころ流行っていたオカルト的な思想に共感さえしていました。自分で死ぬのではなく、天から恐怖の大王が降って来るのでも何でもよいからこの空しい世界を、私もろとも片を付けて欲しいと思っていました。「隠れ自殺」ですよね。何かに集中している時は良いのですが、ふと、自分はどうして今ここにこうして存在しているのだろう？って、目まいがするような感覚に捕えられることがありました。そんな中で、私は大学生の時に教会に足を運ぶようになって、自分の存在というのは、中ぶらりんではなく、意思をもってこの存在を創り出して下さった方があるのだいうことを聖書から教えられ、本当に曇り空でしか無かった心に、燦燦とした温かな光が射してきたような経験を与えられました。私は生きていて良いのだと。嬉しかったですね。この世界は神さまの創造で始まり、その神様が歴史を完成される時があるのだ、その中で私は今生かされているのだ、ということを私は信じました。

1. 「目を覚ましていなさい」

しかし聖書の終末観というのは、捉え方を誤るととても危険な思想になってしまいます。「あなたは死んでも御国が約束されているからこの理想のために命を捧げなさい」というのは、まるで特攻隊のような思想になってしまいます。色んな場所で自爆テロのような事が後を絶ちませんが（最近の日本で起こる様々な事件も似通ったものかもしれません）、それはやはり歪んだ考えでしょう。

今日の聖書の箇所を見て頂くと分かりますように、「終末」とは、私たちが何かをしてそれを早めるとか、私たちが自己犠牲をすることを神様は喜ばれるとか、そのようなことではありません。この13章でイエス様は色々なことを仰っていますが、全体を読んでわかることはイエス様は、ここで私たちに冷静さ、注意深さを求めていらっしゃるのように思います。例えば、5節「人に惑わされないように気を付けなさい」。13節では「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」とありますが、自分で何とかしようとせずに、現実（良くない事も起こる）を見据えながら忍耐することが言われています。自暴自棄とは正反対ですね。そして、今日読んで頂いた32節以下の所では、イエス様は「目を覚ましていなさい」と仰います。あなたには割り当てられた仕事があり、それをする僕、また門番のような者だと。主人（神様であり、主イエスと言って良い）がまた戻って来るまで、その役割を果たしなさいと言われます。浮ついた気持ちが入る余地がありません。淡々と誠実に毎日を生きて行きなさいと。その中に、「決定的な時」が向こうからやって来るのだから、それを楽しみに待っていれば良いのだ、と。「救いの日」は確実に近づいているのです。昨日よりも今日、確かに近づいたのだと。

「目を覚ましておれ」というのは、「一睡もするな」ということではないと思います。それではパワハラです。そうではなく、あなたに見せたいのだと。あなたのための救いが完成する時はやってくる。それをちゃんと自分のものにせよ、見届けよ。その時を逃すな、「目を覚ます」というのはそうことではないかと私は思いました。何と希望と慰めに満ちていることでしょうか。

1. 私たちが真に依り頼むものとは

そもそも、なぜこのような終末の話になったかと言うと、その発端は13章の初めです。エルサレムの神殿の境内から出た時に、弟子の一人が「何と素晴らしい石、素晴らしい建物でしょうか」とこの神殿の佇まいに感動して言った時、イエス様は「人間の手が造った（ソロモン王の）この素晴らしい建造物も無くなる時がやって来るよ、素晴らしい石も永遠ではない、崩される終わりの日が訪れるのだ」というようなことを言われました。これは、単なる終末の時の到来ということではなく、人間の手から神の完全な支配に移る時が来る。この世を統べ治める主人公（主体）が変わることを言っていると思います。

信仰は、それを「先取り」することではないでしょうか。例えばローマの信徒への手紙の中で使徒パウロが言った言葉を思い起こさせます。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」（ローマ12:19）と。私が全面的に責任を負う。「復讐するは我にあり」ということ、「究極のことはわたしに任せなさい」ということです。今日も礼拝の中で「主にまかせよ」と歌いましたけれども、本当にそうです。私が神様に取って替わることではなく最終的な決着をつけて下さる神様にお任せしようということです。これこそ本当の平和ではないでしょうか。自分で決着をつけない。ある意味、忍耐です。右の頬を打たれたら左の頬も差し出すことです。馬鹿げていることかもしれません。自分の頑張りでは出来ません。けれども、打たれても打たれても抵抗しなかったお方がいるではないですか。主イエス・キリスト。この方は、神の独り子であるにも拘らず、十字架の死をご自分の身に引き受けれたお方です。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか分からずにいるのです」（ルカ23:34）と、私たちの内なる罪を背負って、私たちが神様に受け容れられる道を作って下さったのです。聖書は「ここに神の愛がある」と語っていますよね。この愛を知らされた者は、「時」を、「感謝」と「忍耐」の中に過ごすことが出来るのだと思います。神様に祈り、聖霊の力を頂きながら。

エルサレム神殿もそう、またノートルダム大聖堂であっても永遠ではないのです。この川越教会という建物も、いつかは無くなるでしょう。目に見えるものは消えても良いのです。私たちが依り頼むのは、13章31節の言葉の通りです。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。主の言葉。神様が愛をもって語られる言葉に聴く。私たちは礼拝の中で、単に「良い言葉」を聞いているのではなく、私という存在を根底から支え、受け容れてくれる神の言葉を聴いているのです。あの十字架の言葉は正にそうです。ご自分を十字架に追いやった者に対して、「父よ、彼らを赦し給え」。私たちのための祈りです。そして、「わたしは世の終わりまであなたと共にいる」（マタイ28:20）という主の言葉。そのことが、主が再臨される救いの完成の日に、本当だった！と明らかになる時が来ます。神様のお約束は、旧約の預言が成就したように、必ず成ります。‟すべての人”のために。けれどもその約束を知っている者は、生かされている「時」を賢く生きることが出来るのではないでしょうか。37節の言葉をもう一度聴いてお祈り致します。「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい」。

私たちの創造者であられ、イエス・キリストの父なる神様、あなたの言葉を感謝致します。私たちを根底から支えて下さるあなたがいて下さることを感謝します。私たちの存在は、あなたの愛によって創造され、最後はあなたの救いの完成の御計画の中に招かれる、その旅路を歩んでいるのだと思います。どうぞ、この旅路を、どんな時も、あなたが共に歩んで下さい。あなたが救いを鮮やかに見せて下さる時を（それは私たちにはわかりませんが）、その約束を信じて、愛と忍耐の中に歩ませて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。